
スクエア・アウト

右下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スクエア・アウト

【Nコード】

N1956T

【作者名】

右下

【あらすじ】

最近、町で不可思議な失踪事件が起きている。次々と姿を消す町の住人達と、ネットで騒がれている噂「スクエア・アウト」。そして、失踪したはずの一人がネットに残した謎の書き込みの真意とは？

ブローグ

こんな光景を、私は今まで見たことはない。
いや、誰一人このような光景を見た者はいないだろう。

ビルは倒れ、木々は朽ち果て、道路が綻び、仲間達が消去^{デリート}されていく。

みな各々の武器で必死に抵抗をしているものの、圧倒的な戦力差の前にどんどん撤退をよぎなくされる。

ここは茜町^{あかねまち}。

私たちが住んでいる町。

なのに、ここは私たちの居場所はない。

前線から撤退してきた仲間たちと合流し、一緒に走る。

私は呼吸を整え、前方からやってくる集団を見据えながら右手に持つ槍を構える。

だが、ふと気がつくと、周りが恐ろしく静かになっていた。

急いで周りを見回す。

ついさっきまで、今の今までいた仲間たちの姿がない。私の周りには、何もかもなかった。

完全な汚染だ。^{バゲ}

第一章【感覚汚染】

2019年。9月9日。

この日を境に、僕が知っている日常は完全な過去のモノへと変わってしまった。

突如として現れた現実世界での怪事件。

僕は、その一部となっていた。

○

僕はちらりと黒板横の時計を見た。

時刻は八時十五分。僕が登校してまだ五分ほどしか経っていない。

僕は自分の机で頬杖をつきながら、適当に今日のことを考えていた。

今日は英語があるな、友達にどんな話を振ろうか、購買のカレーパンを今日こそ手に入れられるか。

僕はこんな事をおぼろげに考えたくて、早めに学校へ行く。

教室にいるクラスメイトは、まだ数が少なく、この時間帯に来る人間は必然的に物静かな奴なので考え事をするにはもってこいの空間だった。

「うーッス」

僕の肩を軽く叩き、誰かが僕に向かって挨拶をしてきた。

僕はとくに相手の顔を見ずに挨拶を返す。

「おはよう、霧島」

ここで霧島の顔を見る。

きりしまこと
霧島 真。

僕が座っている事も手伝い、いつもより霧島の顔を見るために忌々しく顔を上に向ける。

標準的な顔のパーツをしており、少し長顔で顎がクイツとしているのが特徴的だ。

身長は僕と比べると遥かにでかく、僕と霧島が一緒にいるとさらに自分が小さく見える事が霧島と友達として付き合う面で一番の難点だった。

「毎日毎日、おまえは小さいなあ」

「そりや毎日小さいけど…人はいきなり大きくなったりしないよ。いや、大きくなれるなら僕はそれでも構わないけどさ」

霧島はカラカラ笑いながら、自分の席に荷物を置きに行った。

いつも通りのやり取りだった。僕の身長を話のネタにされるのも、今では当たり前前の会話風景だ。

来月で僕は十八歳の誕生日を迎える。

高校三年になり、早くも二か月が経った。五月に実施された、身体測定はいやな結果だけを残し去って行った。

僕は身長を明確に数値にするだけでも顔が変形するくらい嫌だ。

だから身体測定の日には霧島に取り押さえられるまで、ずっと逃走ルートを考えていた。

憎いあの日の事を思い出して陰鬱な気分になっていると、隣の机に誰かが座った。

「こっち向いてー」

「ん？」

「滅死^{めっし}！」

バチィ！と激しい音を立て、僕は何故かでこピンをされていた。

あまりの強さと痛さに僕は両手ででこを覆い、必死に痛みを意識から遠ざける。

「朝から暗いなー君あー！」

「ててて…やっぱ^{あせくら}校倉か…」

「そーです、校倉さんですよー。目が覚めましたー？」

校倉はシニカルに笑い声をあげた。

校倉 あせへんじみ 巫女。

二度のクラス変えがあつたのにもかかわらず、三年間同じクラスに配属された腐れ縁の女友達だ。

少し赤みがかった髪の色は地毛で、どこかヨーロッパあたりの人種のような髪質だが、本人が言うには「あたしは純国産だあ！」と言
い張っている。

容姿は中の上くらいで男子からの評判も上々、性格も天真爛漫で男
女の友人が多く、クラス一のムードメイカーだ。

身長は僕より二センチ高く、女子としては高い部類に入る。

上記の点だけで考えれば、校倉と友人でいるのは男子として非常に
良い事なのだが、いかんせんコイツは五月蠅いのだ。

入学当初は『可愛い子が入学した』と少し騒がれたが、時が経つに
つれ『可愛い子』というのはは誤認識で『黙っていれば可愛い子』
という正しい認識が定着した。

「あーもー、朝からやかましい奴だな。何かいい事でもあつたの？」

「やかましくありませんー、かしまひんですー。いい事は起きま
した。昼神 ひるかみ にでこピン出来た事です」

「変に言葉を上品にして自分を着飾るな！あと、おまえのでこピン痛すぎだろ！」

「おー、やっぱり校倉いると昼神は元気になるな」

いつの間にか霧島が僕の机の前にいた。

さっきと同様に門がカラカラと笑いながら、聞き捨てならない発言をかましてきた。

「おはよ！霧島君！」

「おう、おはよう校倉」

「おい、霧島」

「そうそう、今日は二人にぜひ聞かせてやろうと思ってた話があるんだ」

「おいつてば。人の話は聞け」

「実はだな、最近ネットで妙な噂が流行っているらしいんだわ」

霧島は僕の言葉を一切無視して、その噂話というものを嬉々して説明しだした。

「おまえら『スクエア・アウト』って言葉、知ってるか？」

「何、ソレ？」

「あー！あたしも知ってる！」

「お！やつぱり有名なんだなあ。噂。つっても、ここに知らない田舎者がいるが」

「ホントだよー、まさか知らないなんて。どこ出身？」

「いや、君たちと同じこの茜町出身だけど…」

まるで「呼吸の仕方も分からないの？」とも言いたげな上目線で、二人は僕を小馬鹿にするように説明を続けた。

「昼神、最近この町で人が謎の失踪をとげている事件は知ってるよな？」

「まあ、ね。昨日見たニュースでは、今のところ全部で十九人いなくなっただけ」

「そう、それだ。んで、この事件に対してある掲示板に書き込みがあっただ。何だと思う？」

霧島はもったいつけるように、ここで言葉を切った。

僕に、続きの催促をしると言わんばかりの顔をしてきた。仕方なく、僕はため息交じりに応じた。

「…えーっと、どんな書き込みだったの？」

「内容は何ともSFチックなものなんだがな。この事件でいなくなった連中はみんな、ある『存在』から別世界でゲームに参加する権利を与えられた者。だから、いなくなつた、んじゃなくて、あつちに行つた、なんだとよ」

「そうそう！でも、驚くのはまだ早いよー」

「いや、別にまだ驚いてないけど…」

「実はその書き込みをした奴つてのが、あの事件の被害者の一人なんだ」

「へえ、証拠は？」

「証拠に自分の顔を一緒にアップしたんだ。首から下は映つてなかったけど、なんか不思議な格好しててさ、髪の毛の色も群青色でさ」

若干興奮気味にまくしたてる霧島と校倉に対し、僕は極力表情を変えず質問する。

「その書き込みしたのって、ホントに被害者の一人なの？」

「髪の色が全く違うから確証はないけど、顔はそっくりつちやーそ
つくりだつた。あの顔に一致する被害者は一人。名前は百崎ももやまききょういち恭一、
二十三歳。十三番目に失踪した人だ」

「ふーん。警察とかは、この事知らないの？」

「警察はただの悪戯として見てるだけで、まったくありあつてくれないんだって。どこで書き込んだか調べるだけ調べればいいのによ。もしホントだったら解決の糸口になるのにさ」

「まあ、そんなもんだよ」

普通に考えれば、誰だってただのたちの悪い悪戯だろうとしか認識しないだろう。

顔写真だって今の時代、ちょっと加工技術があればどうにでもなる。

失踪している理由もありきたりな妄想設定って感じだし、リアリティーも欠けているせいでちっとも本気になれない。

ファンタジックすぎて、頭の固い警察などは絶対に取り合ってはくれないだろう。

「それで、その人の書き込みってのはそれだけ？」

「いやー、それが結構書き込みはされるんだけどよ。ほとんどの文章がなぜか文字化けしててさ、まともに解読できるのが少ないんだ」

すかさず校倉がフォローを入れる。

「でも！一つだけまともに読めた注意事項があつてね。確か『頭の中で、突然鐘の音が聞こえたら危険』なんだって」

「鐘の音？」

「うん。教会とかで聞く、カーンって大きな音が響くんだけど、自分以外には聞こえてないらしくて、これが聞こえたら合図なんだってさ」

「合図って？」

待ってましたと言わんばかりに、二人は顔を見合わせ、一拍空けて二人は口調を合わせて言った。

「スクエア・アウトの！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1956t/>

スクエア・アウト

2011年10月5日19時47分発行